

美術史学研究室

美術史はその名が示す通り、「美術」と「歴史」という二つの基本的な要素を含んでいます。前者は私たちが対象とするもの、つまり美術作品を、後者はそのアプローチの手段、つまり一定の歴史性に根ざした探求を指し示していると言っていいでしょう。しかし一口に美術作品といってもその範囲は古今東西の諸作品に及び、絵画、工芸、彫刻、そして写真、映像作品など、広い意味での「イメージ」がその対象となります。本研究室では、ルネサンス美術や印象派など比較的私たちに身近な美術だけでなく、中世美術や中国などの東アジア美術、イスラーム美術など、人類の歴史と共に歩んできたイメージの、時間・空間的により広がりをもったパースペクティブが常に意識されているのです。

しかしまず作品を前にして私たちが行うことは、とてもシンプルな作業です。それはディスクリプションです。作品に描かれている個々のものについて、ひとつひとつ言葉で丁寧に表現していくのです。ただ眺めるのではなく、言葉にしていくという作業を経ることで、今まで単に見ていただけのものが、実はよく見えていなかったことに気づき、意外な発見をすることがあります。「ことばにできない大切なものがある！」と一般的に言われることがあります。このディスクリプションの作業を経ると、逆に言葉にできないものは「見えていない」とも言い得ることが理解できます。そして一見このシンプルな作業も、じつはかなりの難敵であることが分かってくるでしょう。

そしてこの次の段階では、当作品についての先行研究を調べ、また同時代の資料などにも触れ、その作品についての認識を新たにしたり、また自分の考察を説得力あるものにしていきます。この作品は本当にその画家の手になるものか、主題は一体なにか、従来考えられてきた主題とは違うのではないか、発掘された地域がこんなにも離れているのに、Aという磁器とBの磁器に使われた技法がほぼ同じなのはなぜなのか…などなど、作品をめぐる問題は多様なかたちで存在します。また作品を生み出した場、作品の受容された場も重要になってきます。作品はただそれだけで純粹に存在するものではなく、当時の政治、社会、あるいは人間の基本的な欲求などといった色にあらかじめ染められているからです。もちろん学生が最初から高度な分析を行うことは不可能に近いことです。しかし、本専修課程には美術へのアプローチのスペシャリストが7人もいらっしゃいます。先生方のご指導を受けながら、私たちも日々鍛錬を積むことができるでしょう。

本専修課程の先生方はそれぞれ日本、中国、ドイツ、フランス、イスラーム美術をご専門とされています。授業やゼミが豊富に用意されていますし、違う大学に勤めていらっしゃる先生による授業や集中講義も準備されているので、自分が勉強したい分野の美術が必ず見つかるはず。大学院生との交流も盛んで、一緒に勉強会を開くこともあれば、美術館の夜間開館を利用して院生と学部生で見学に行くことも可能です。せっかく文学部に行くのなら、好きなことを思い切り勉強してはどうでしょう？美術が好きで、それについて勉強したいという方をお待ちしています！

教員紹介

あきやまあきら
●秋山聰 教授

専門はドイツ中近世美術史。アルブレヒト・デューラーを中心に研究される一方、聖遺物など、広い意味での宗教的な造形物にも関心を持っておられます。現代日本によみがえったデューラーは、ユーモアあふれる語りで学生を笑わせてくださいます。無比のクラシック音楽好きでもあり、研究室からはよく優雅な音楽が聴こえてきます。

たかざしあきら
●高岸輝 准教授

専門は日本中世絵画史、特に室町時代のやまと絵です。授業では絵巻に対する情熱を学生に語り、学生も積極的に発言・議論できる温かい雰囲気を作ってくださいます。美食家で、料理でも右に出る者はいないともっぱらの評判です。

はがきょうこ
●芳賀京子 准教授

専門は古代ギリシア・ローマ美術、特に彫刻です。平成30年度から着任されました。授業では古代美術はもちろん、中世以降での古代作品の受容もお話くださるので、どんな時代に関心を持っていても面白く受講できます。凛とした雰囲気をお持ちの、とても面倒見のいい先生です。

みうらあつし
●三浦篤 教授（総合文化研究科）

専門は19世紀フランス美術史、日仏美術交流史。三浦先生は駒場の総合文化研究科の先生ですので、教養課程で既に授業に出席したことのある方も多いのではないのでしょうか。毎年本郷でも熱のこもった語り口でフランス近代美術史（日本近代洋画の年もあります）の講義を行い、学生を魅了してくださっています。

ますやともこ
●榎屋友子 教授（東洋文化研究所）

専門はイスラーム美術史。榎屋先生はまさに学生たちの「お母さん」的存在です。毎年、イスラーム美術の授業がゼミ形式で週1時間行われます。イスラーム美術には馴染みが薄いという学生も多いかと思いますが、先生は優しく笑顔で教えてくださるので、心安らかに勉強できる1時間となります。

いたくらまさあき
●板倉聖哲 教授（東洋文化研究所）

専門は中国絵画史、特に南宋から明にかけての絵画です。東アジア文化圏でイメージがどのように共有され差異化されたかを比較し、その過程を研究されています。東洋美術ゼミでは、学生の発表に対して、研究史から参考文献に至るまで細かく指導してくださいます。作品の前での熱い語りは必見。舞台などにも非常に造詣が深く、常に学生たちを刺激してくださいます。

つかもとまるみつ
●塚本暦充 准教授（東洋文化研究所）

専門は中国絵画史。中国や台湾への豊富な留学経験をもち、大和文華館・東京国立博物館で学芸員として、中国美術に関する数多くの展覧会を企画されてきました。朴訥な語り口の中に、中国美術の深い知識がにじみ出ています。

卒業後の進路

文学部に行って就職できるのかな…などと不安を抱えている方もいらっしゃるかもしれませんが、ここ美術史学研究室では、毎年就職を希望する学生はほぼ順調に職を見つけて社会に巣立っていきます。以下に挙げたようにその業種は実に様々です。

また美術館の学芸員になりたい、という希望を持っている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。学芸員を志す学生は、多くの場合は修士課程修了後か博士課程在籍中に（修士課程在籍中に就職の決まる人もいます）学芸員職を見つけて全国各地の美術館に就職しています。

平成30年度卒業生

▼学部生 就職6名、進学2名

読売新聞、楽天、NTTドコモ、レンゴー、ビデオリサーチ、XYMAX
東京大学大学院美術史学、東京大学大学院情報理工学系研究科

▼大学院生

ニッセイ情報、日本学術振興会、株式会社学陽書房

平成29年度卒業生

▼学部生 就職10名、進学4名

みずほ証券、りそな銀行、日本テレビ、ビジュアルワークス、楽天、テレビ朝日、オリバー、フォルシア、西松屋チェーン、三井デザインテック、東京大学大学院美術史学

▼大学院生

岡山県立美術館、朝日新聞文化事業部

留学について

海外の大学や大学院で美術史を学びたいと思っている方もいらっしゃることでしょう。西洋美術史を専攻する学生は多くの場合、博士課程に進学後、東大を一時休学して海外の大学院で専門的に美術史を学んでいます。現在でもフランス、イタリアなどで博士課程の先輩方が研鑽を積んでいます。学部や修士課程在籍中には、自主的に短期間の語学留学をしたり、文学部のプログラムを通して海外に行くこともあります。

美術史のための最初の一冊

●西洋美術史（邦語のみ。少し専門的なものも含めました）

- 青柳正規ほか編『世界美術大全集 西洋編』全28巻、小学館、1994—1995年
小佐野重利・三浦篤ほか編『西洋美術の歴史』全8巻、中央公論新社、2016—2017年
秋山聰『聖遺物崇敬の心性史：西洋中世の聖性と造形』講談社、2009年、
文庫版2018年、講談社学術文庫
秋山聰『天才と凡才の時代—ルネサンス芸術家奇譚—』芸術新聞社、2018年
芳賀京子『ロドス島の古代彫刻』中央公論美術出版、2006年
三浦篤『まなざしのレッスン1：西洋伝統絵画』東京大学出版会、2001年
三浦篤『まなざしのレッスン2：西洋近現代絵画』東京大学出版会、2015年
三浦篤『近代芸術家の表象：マネ、ファンタン＝ラトゥールと1860年代のフランス絵画』
東京大学出版会、2006年
三浦篤『エドゥアール・マネ：西洋絵画史の革命』角川選書、2018年

●東洋美術史

- 辻惟雄ほか編『日本美術全集』全10巻、小学館、2012—2016年
佐藤康宏ほか編『講座日本美術史』全六巻、東京大学出版会、2005年
佐藤康宏『日本美術史』放送大学教育振興会、2008年
佐藤康宏『もっと知りたい伊藤若冲：生涯と作品』東京美術、2006年、改訂版2011年
佐藤康宏『絵は語りはじめるだろうか』羽鳥書店、2018年
佐藤康宏『若冲伝』河出書房新社、2019年
高岸輝『室町王権と絵画：初期土佐派研究』京都大学学術出版会、2004年
高岸輝『室町絵巻の魔力—再生と創造の中世』吉川弘文館、2008年
高岸輝ほか編『天皇の美術史』全6巻、吉川弘文館、2017—2018年
柘屋友子『すぐわかるイスラーム美術史』東京美術、2009年
柘屋友子『イスラームの写本絵画』名古屋大学出版会、2014年
板倉聖哲『李公麟「五馬図」』羽鳥書店、2019年
板倉聖哲ほか編『典雅と奇想：明末清初の中国名画』東京美術、2018年
塚本麿充『北宋絵画史の成立』中央公論美術出版、2016年